

妹は
親父を
拒めない!?

①

IronSugar
'アイアンシュガー'

その日、俺はバイトを
予定より早く終えて帰宅した。

家に到着したのは
夜の8時を回った頃だった。

こんなに早く帰ってくるのは
結構、久しぶりだ。

普段は遅番シフトがメインなので
帰宅は深夜を回る事が多かった。



今日も予定では
深夜までのシフトのはずだった。

だが、客入りが悪かったので
店長の判断で今日は
早引けする事になったのだ。

早く帰れるのは嬉しかったが
その分収入が減ってしまうので
少し残念な気分もあった。

ただいまあ〜。

おはよう





.....あれ？

シ～ン



玄関先で声を上げてみるが、
反応が返ってくる気配がない。

どうやら、家にはまだ誰も
帰って来ていないみたいだった。



ふうく...。
ただいまつと。

かきまわし



まだ8時か：：最高だな。
やっぱたまには早い時間に
帰るのも気分いいなあ：：。

でも、深夜のシフトの方が
客も少なくて時給もいいから
割りが良いんだよなあ。



自室に戻った俺は
特にすることもなく
ベツトでダラダラしていた。

夕飯はバイト先で済ませてきたし、
寝るまで時間は使い放題なので、
俺はワクワクしていた。



とりあえず…
風呂でも入ってくるか。

あ…そういや今日はまだ誰も
入ってないんだっけ…?
じゃあ、お湯溜まってないのか。

うん…
シャワーにしとくか今日は。

俺は着替えを持って
部屋から出た。

そういえば冷蔵庫に
親父の缶ビールが
ストックしてあったはず。

風呂上がりにビールも良いなど
考えながら俺は風呂場に向かった。

風呂場は一階にあり
階段のすぐ横に
脱衣所のドアがある。

そのドアが閉まってる事に
気づいた俺は、おやっ？っと思った。

普段は脱衣所のドアは開いており、
閉める場合は「いま使ってる」という
メッセーヂだったからだ。

脱衣所のドアが閉まってるという事は
今、誰かが中にいるということになる。

でも、特に中から音もしないし、
人の気配も感じられない。

誰かがうっかりドアを閉めて
そのままになってるだけか？
まったく、紛らわしい。



えっ...?

!!!

Hand icons and exclamation marks

ドアを開けた瞬間、
女の裸体が視界に飛び込んでくる。

俺の目の前には上半身裸の
妹の**有理香**が立っていた。



あ……わ、わりい。
すまん！



ガシ

ガシ

カシ

予想外の光景に混乱した俺は
あわててドアを閉めた。

有理香の裸を見たのは、
5、6年ぶりくらいだろうか。

昔はガリガリだったのに
今ではすっかり女らしい
身体つきでビックリした。

しかし、それ以上に俺を
動揺させることがあった。

半裸の有理香の背後に
立っていたのは
明らかに**親父**だった。

俺が感じた違和感の
原因はそこだ。

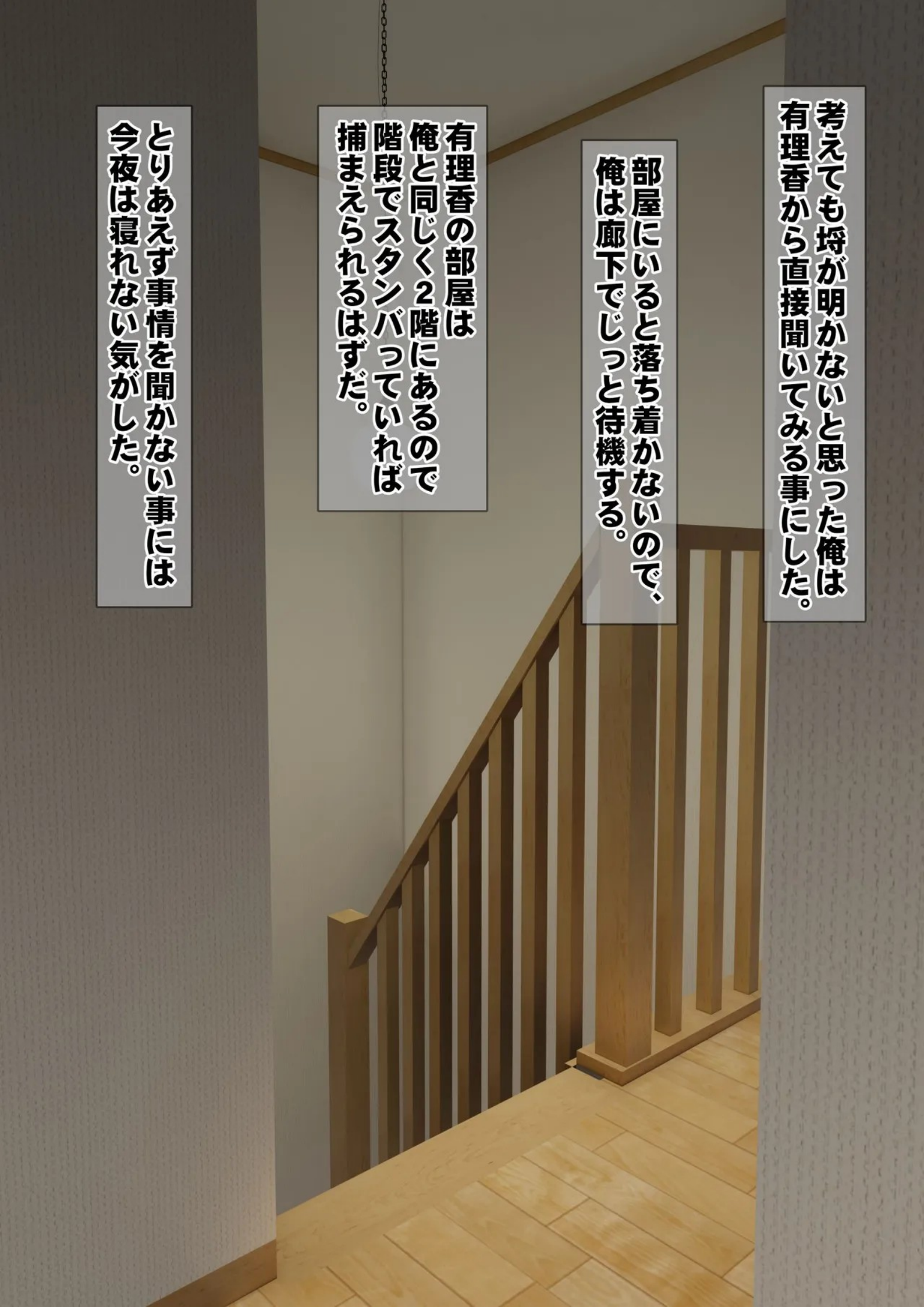
なんで有理香は
親父と風呂に入ってたんだ？

部屋に戻った俺は
悶々と考えこんでいた。

確かに昔はよく有理智と親父は
風呂に入っていたけれど、
それも随分前に卒業したはず。

なんで今になって
再開したんだろうか？

考えれば考える程、
俺の頭のモヤモヤ感は
深まっていった。

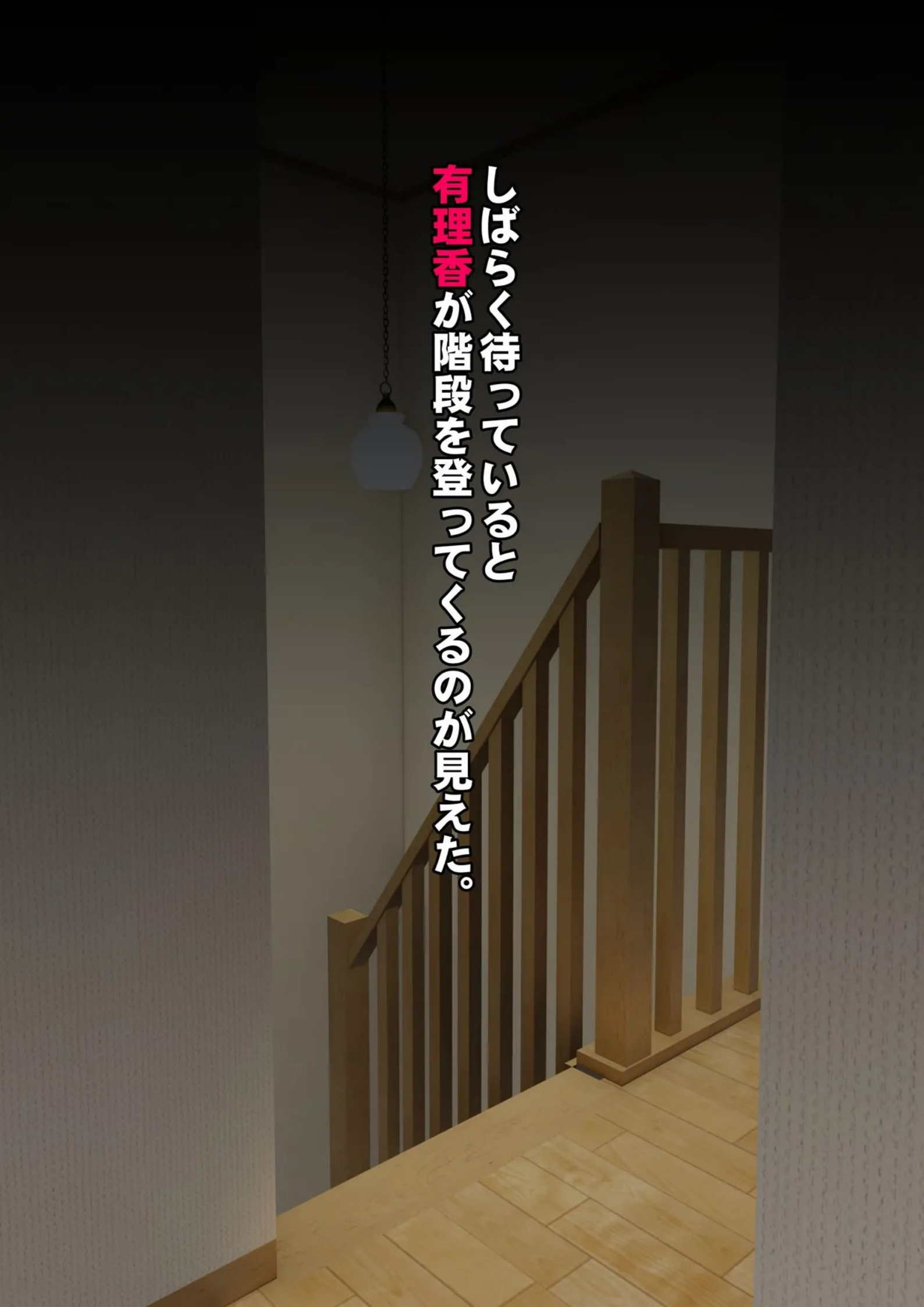


考えても埒が明かれないと思った俺は
有理香から直接聞いてみる事にした。

部屋にいと落ち着かないので、
俺は廊下でじっと待機する。

有理香の部屋は
俺と同じく2階にあるので
階段でスタンバっていれば
捕まえられるはずだ。

とりあえず事情を聞かない事には
今夜は寝れない気がした。

A dimly lit staircase with a wooden railing and a hanging light fixture. The text is overlaid on the image.

しばらく待っていると
有理香が階段を登ってくるのが見えた。

お、おう。・有理香。
ちよつといいか？

。。。は？なに？



俺が話しかけると
面倒臭そうに顔を
しかめる有理香。

まあ、無理もない。

俺は普段、大学とバイトで忙しく
有理香とはすれ違い生活なので
こうやってまともに話すのも
数か月ぶりだったのだ。



お前さあ……なんで
親父と風呂に入ってるの？

はあ？なにそれ。
アンタに関係ないじゃん。

いや……だってさ。
お前もう**高校生**なんだし。
さすがに親父と風呂は
おかしいと思ってさ。



今日のは、たまたまお風呂の
時間がかぶっただけだって。

ま、たまにはお父さんの背中
流してあげようかなって。
親孝行になるじゃん？

いや・だからといって、
その歳で変だって。マジでさ。

は？勝手に変だとか
決めつけないでくんない？
それアンタの価値観でしょ。

てかアンタこそ人の裸、
勝手に見といてよく偉そうに
説教できるよね？

う…そ、それは事故だろ。
誰もいないと思っただよ。

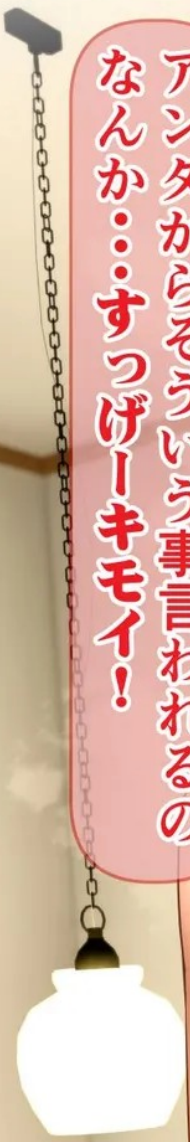
てか、何をそんなに
気にしてるのか
知らないけどさ。

お父さんとお風呂入ったくらいで
いちいち騒がないでくんない？

ハァ〜

アンタからそういう事言われるの
なんか……すっげーキモイ！

〜



な：なんだお前。
その言い方はないだろ。

大体お前は…うっ！

ドキッ

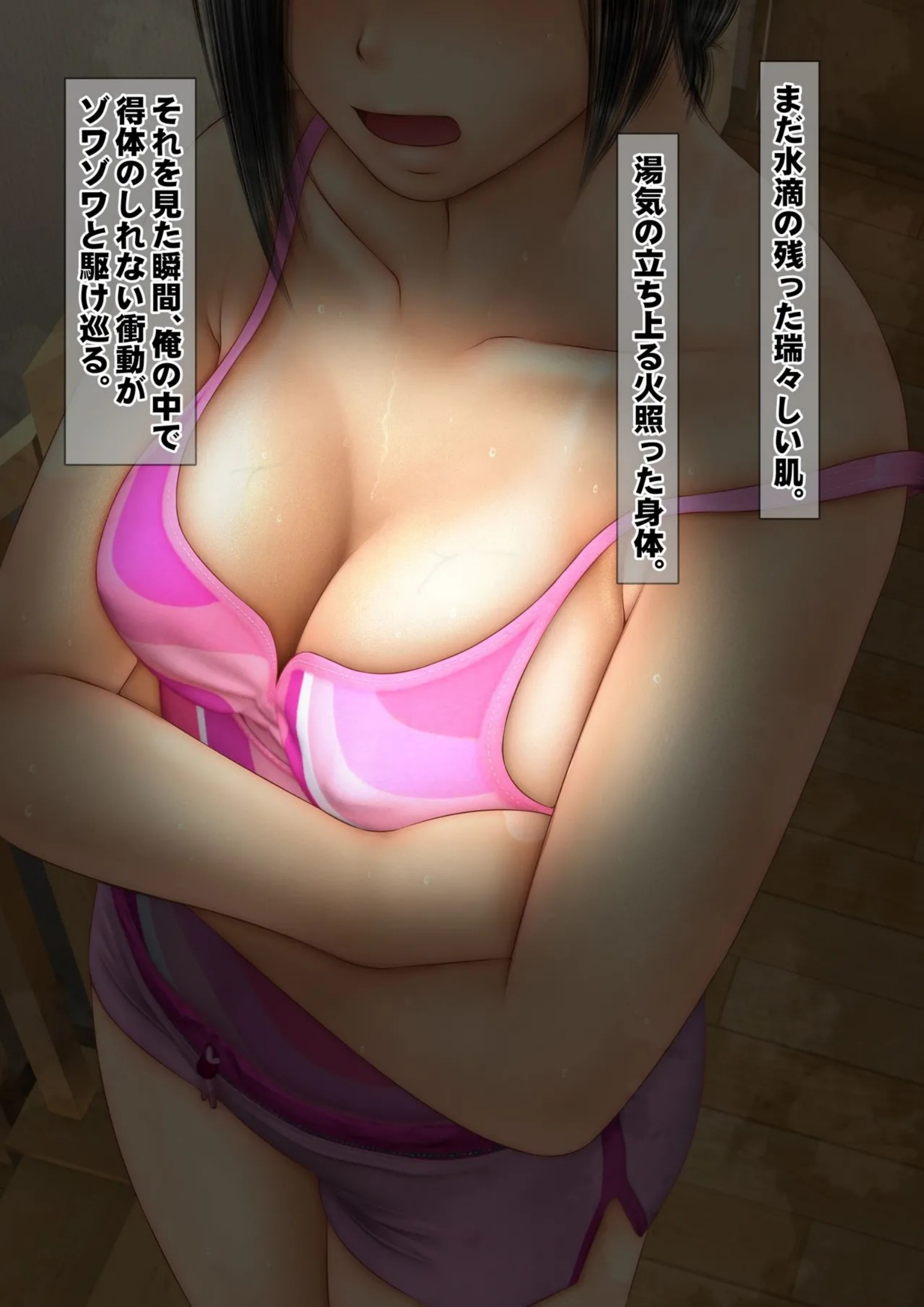
なによお。





有理香の言葉にカチンと来て
言い返そうとしたその時。

有理香の胸の谷間が
視界に飛び込んできた。



まだ水滴の残った瑞々しい肌。

湯気の立ち上る火照った身体。

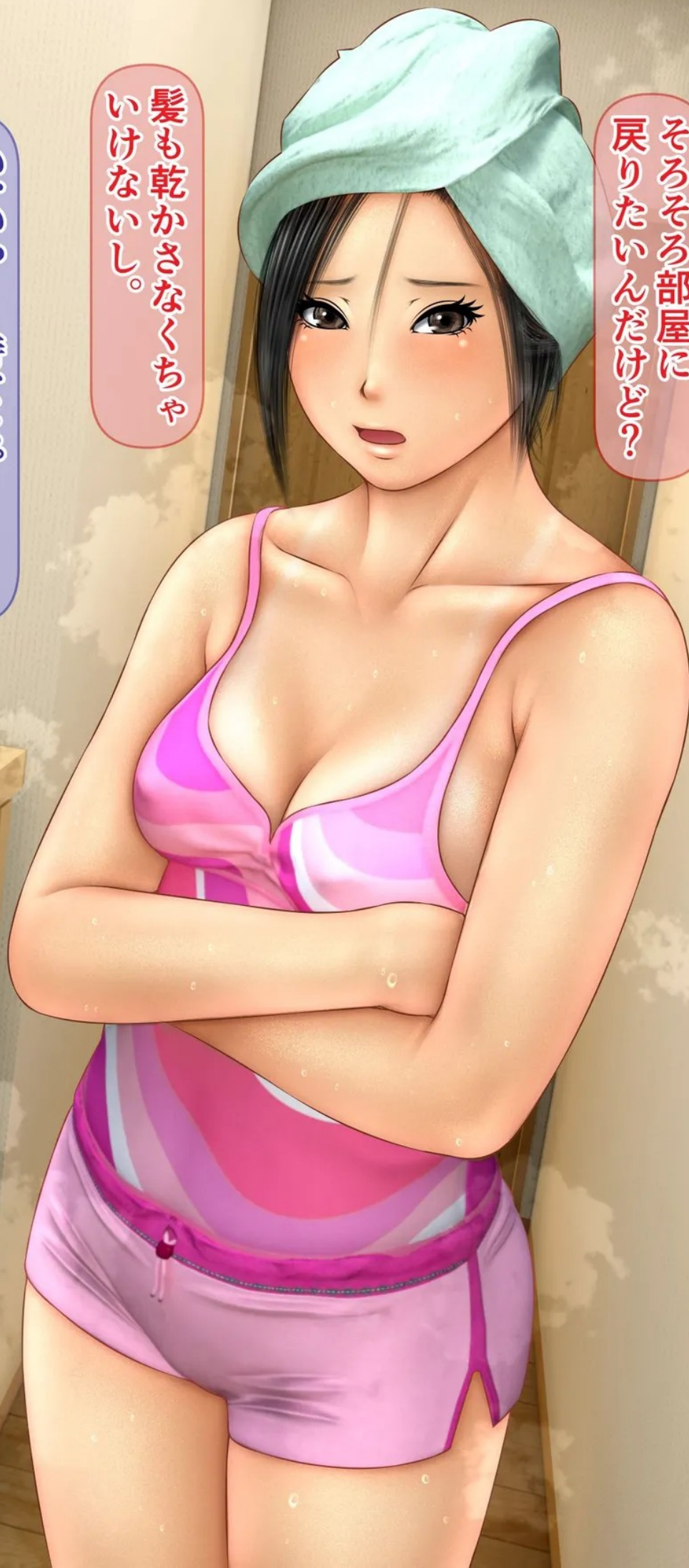
それを見た瞬間、俺の中で
得体のしれない衝動が
ゾワゾワと駆け巡る。

で……?
話はそれだけ?

そろそろ部屋に
戻りたいんだけど?

髪も乾かさなくちゃ
いけないし。

い、いや……待てよ。
まだ話は済んでないだろう?




つたくもおろ……
面倒くさいなあ。

これ以上、何を
話す事あんのよう？

い、いや……だから
さっきから言ってるだろ？

親父と風呂なんて……
みつともない事やめろよ。



有理香を説得しつつも、俺の視線はむき出しの太ももに移っていった。

肉付きが良く
柔らかそうな太ももを
何度もチラ見してしまう。

おかしいぞ……俺。

なんで妹のことを
こんなエロい目線で
見てるんだ俺は？

は？なにそれ？
そんなこと指示する権利
アンタにあるわけ？

普段、家の事なんて
何にも考えてないクセに。

アンタは大学とバイトで
人生エンジョイして
ホント良い身分だよね。

頼むから私たちの事は
もうほっといて。



俺は有理香と口論しつつも
意識は上の空状態だった。

ふと気づくと視線は
有理香の胸や太ももに
引き寄せられていく。

数か月ぶりに話したとはいえ、
なんで俺は実の妹の事を
こんなに意識してしまうのか。



ちよつと・・・なに？
さつきからボクっとなし
しちゃってさあ。

ちゃんと話す気あんの？

てか・・・こういう
やり取りってマジ
時間の無駄！

もういい！
部屋戻るわ。




おい！ちよつと待てつて。
まだ話は途中だろ？

うるさい。
もう今日は
話しかけないで。

待てつて！有理智。
おい！

ポン

ポン



引き留める俺を無視して、
有理香はさっさと
自分の部屋に向かっていく。

その後ろ姿を追いながら
俺の視線はまたしても
エロ目線になっていた。

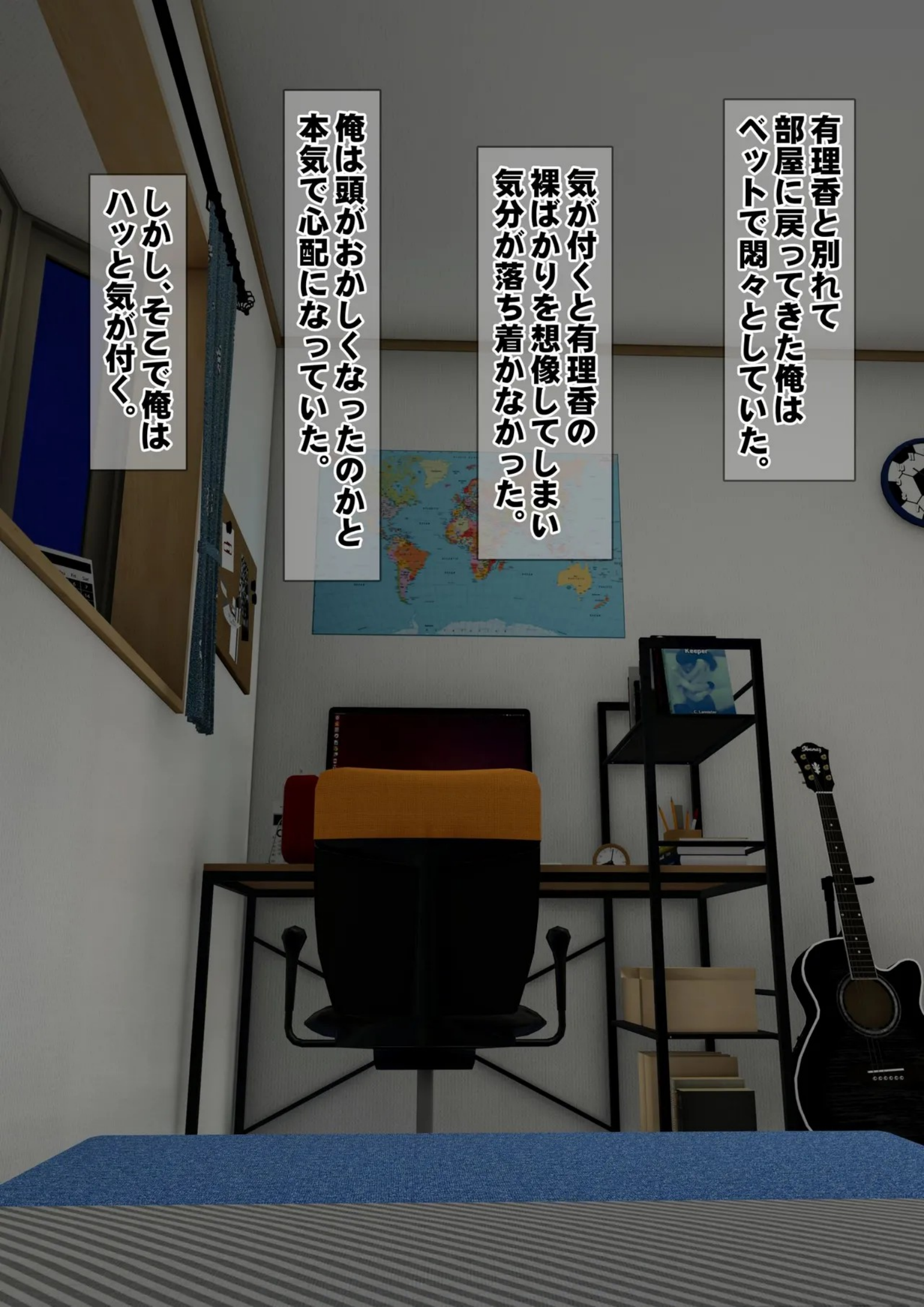
やがて部屋に入った有理香は
ドアの鍵をカチャリとかけた。

有理香と別れて
部屋に戻ってきた俺は
ベットで悶々としていた。

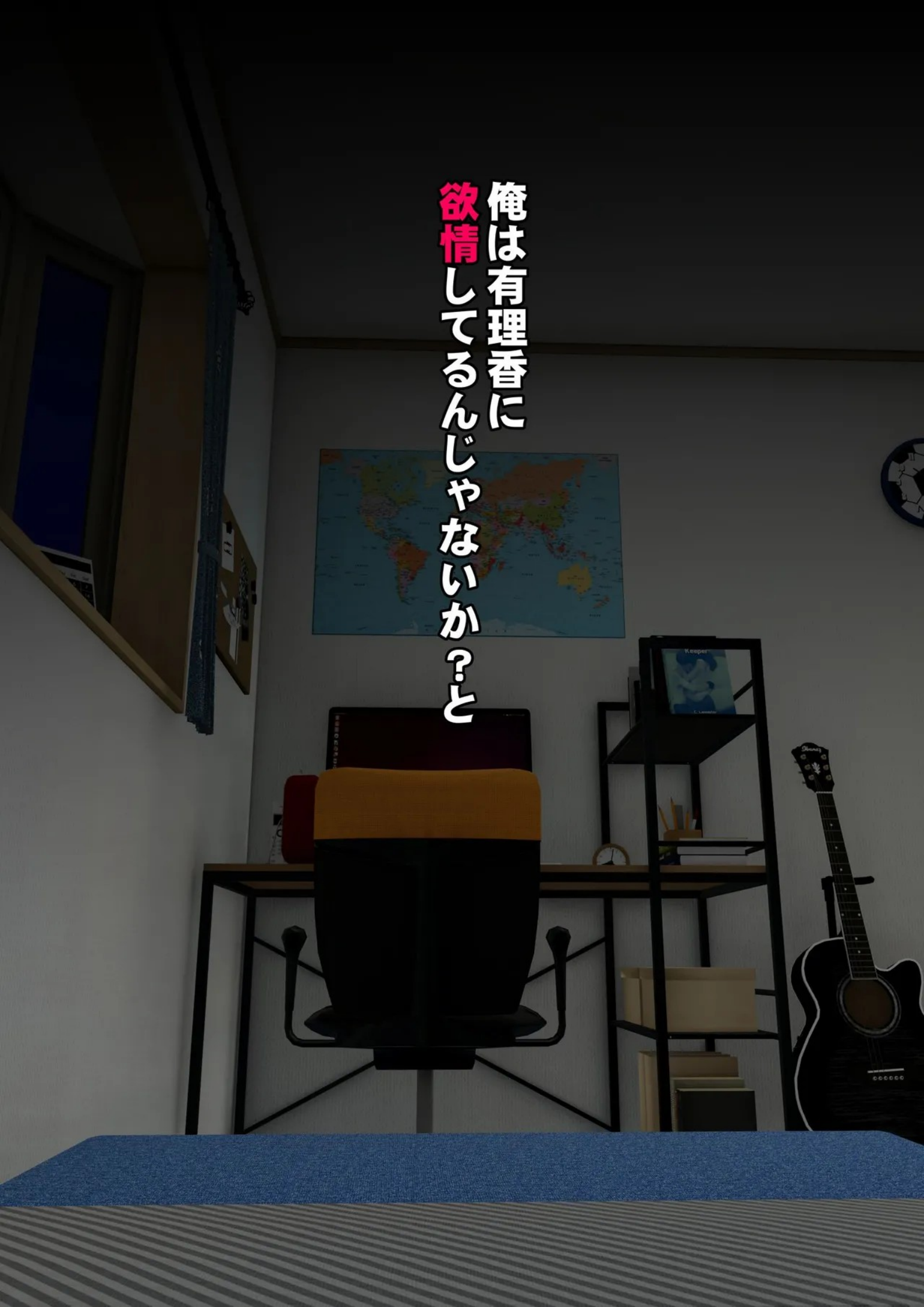
気が付くと有理香の
裸ばかりを想像してしまい
気分が落ち着かなかった。

俺は頭がおかしくなったのかと
本気で心配になっていた。

しかし、そこで俺は
ハッと気が付く。



俺は有理香に
欲情してるんじゃないかと

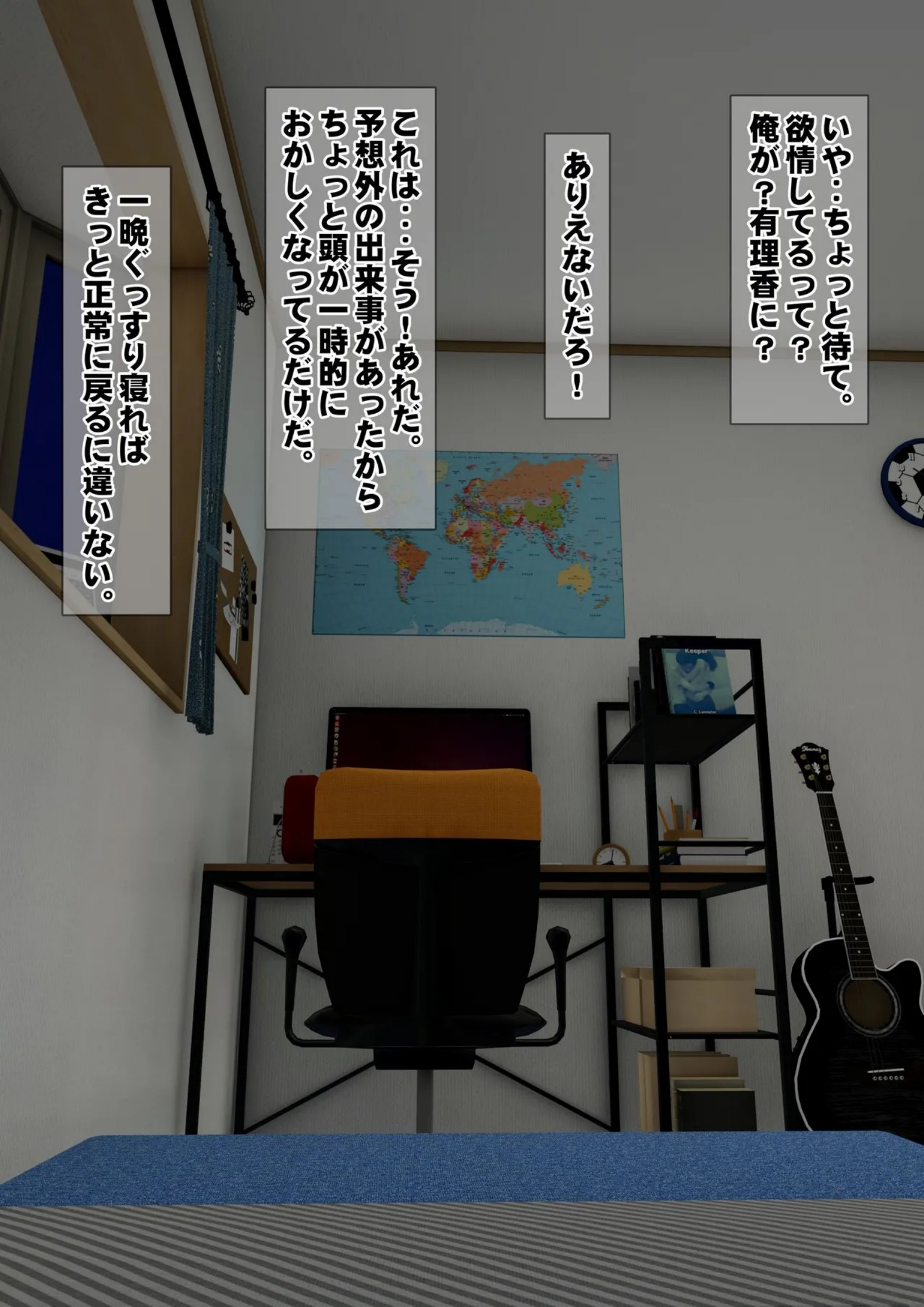


いや：ちょっと待て。
欲情してるって？
俺が？有理智に？

ありえないだろ！

これは：：そう！あれだ。
予想外の出来事があったから
ちよつと頭が一時的に
おかしくなってるだけだ。

一晩ぐっすり寝れば
きつと正常に戻るに違いない。



俺は雑念を振り払おうと
早々に就寝することにした。

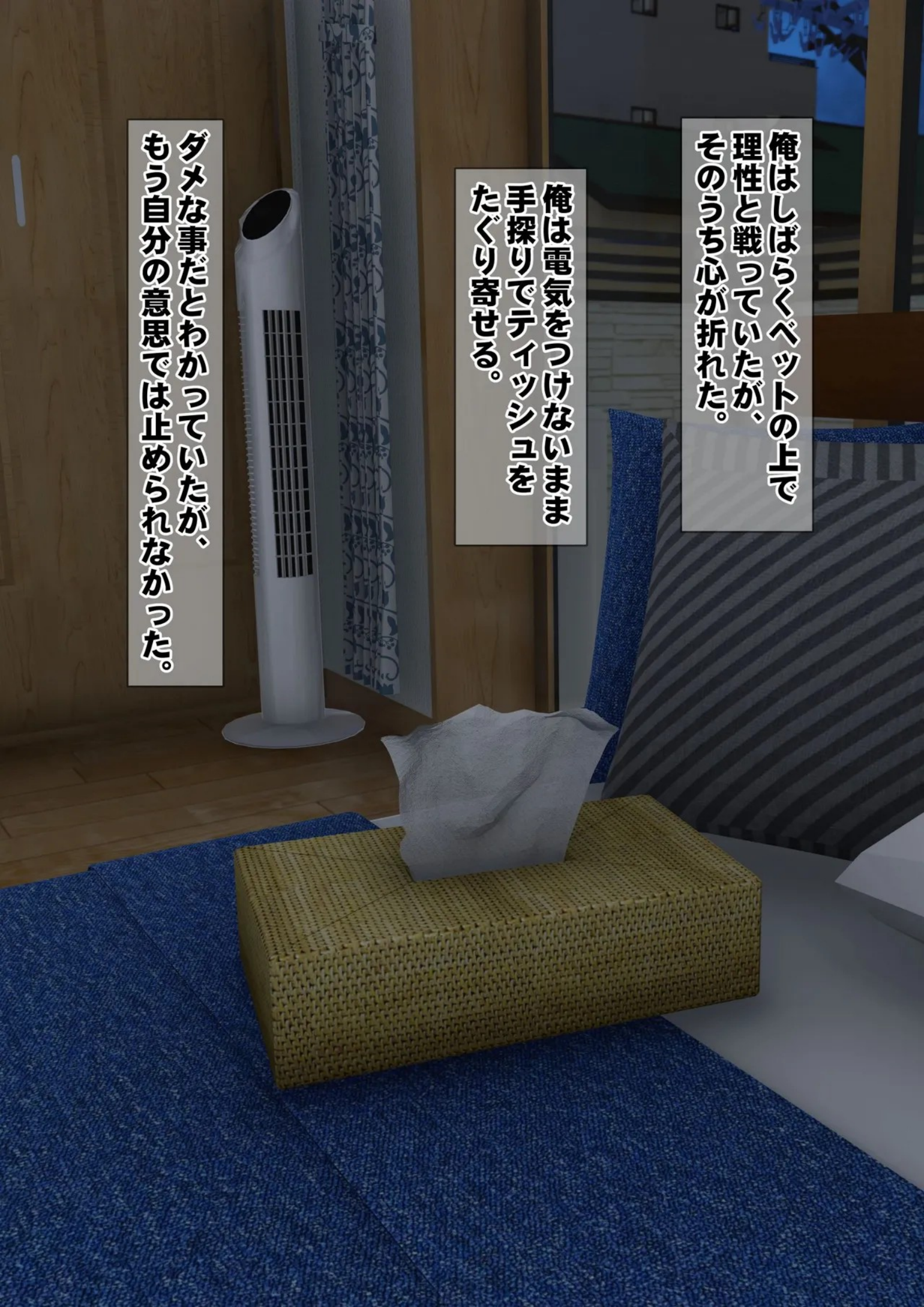
だが、ベッドに潜り込むと
俺の悶々とした感情は
更に深みを増していった。

目を閉じると
どうしてもアイツの身体が
脳裏によぎってしまふ。

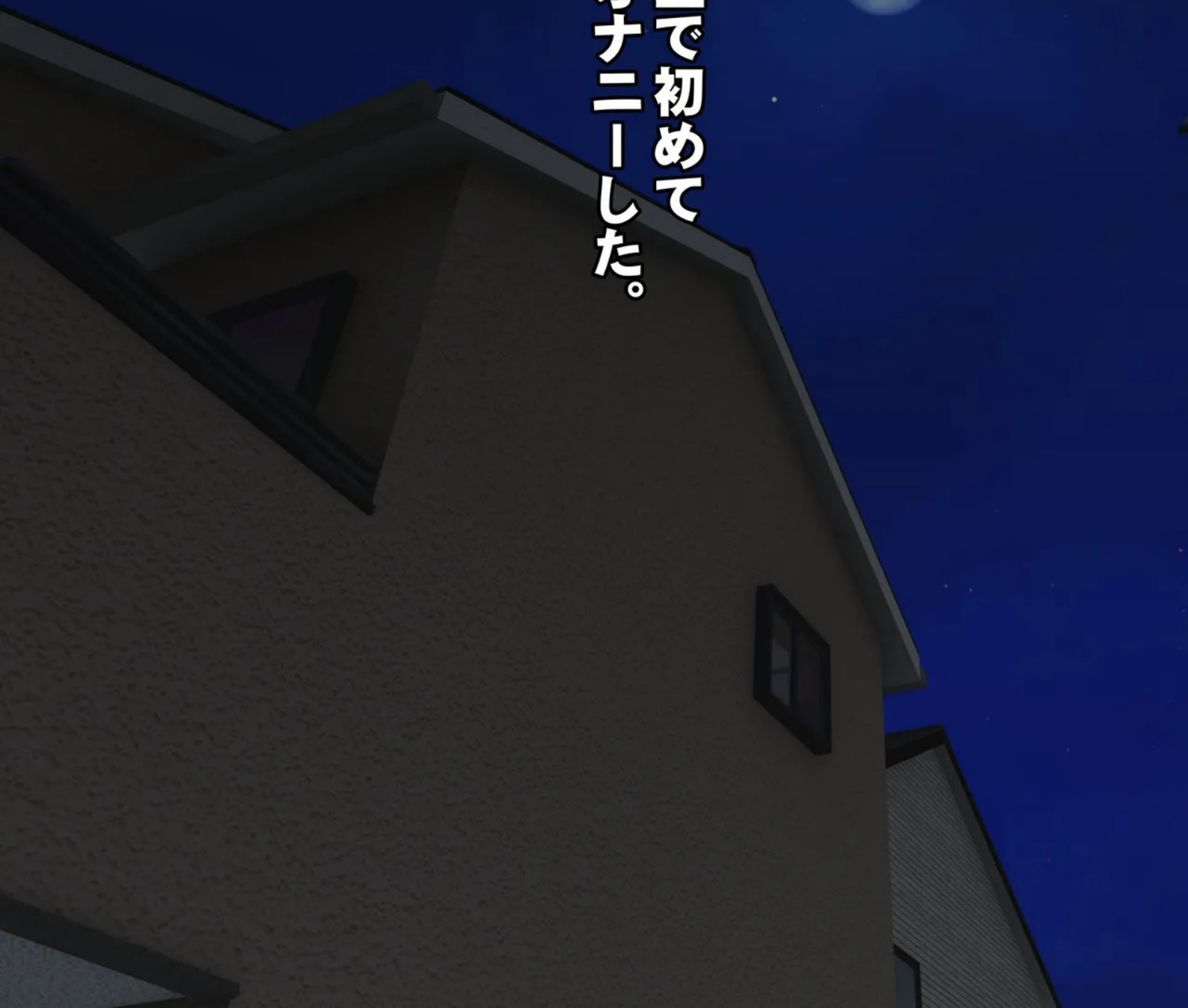
俺はしばらくベツトの上で
理性と戦っていたが、
そのうち心が折れた。

俺は電氣をつけないまま
手探りでティッシュを
たぐり寄せる。

ダメな事だとわかっていたが、
もう自分の意思では止められなかった。



その夜―俺は人生で初めて
実妹をオカズにオナニーした。



目をつぶると、
脳裏に有理智の裸が
浮かび上がってくる。

張りのある肌。
滴り落ちる水滴。
丸く突き出た胸。

実の妹の裸を思い出しながら
俺は猛烈にチンポをしごく。

あっ...

んっ...

はっ...

あっ...

んっ...

んっ...

はっ...

妹の身体を夢想しながら
俺は異常な興奮に包まれていた。

んあ..

あの柔らかかそうな胸を
思いつきり揉みたい。

ぷっくり膨らんだ
あの乳首に吸い付きたい。

んあ..

有理香の身体を全身
舐めまわしたい！

はあ..

あ..

あ..

あ..

はあ..

んあ..



「うまうまうま」

「ジュジュ」

「ジュジュ」

「ジュジュ」

俺はその夜、
有理香をネタに何度も
抜いて抜きまくった。

妄想の中で実の妹を
一晩中、犯しまくった。

気付けば夜も白みはじめ
使ったティッシュも
山のようになっていた。

こんなに興奮したのは
生まれて初めての経験だった。

ようやく興奮も
収まってきたところで
俺はさっきの件を再び
考え始めていた。

そういえば芸能人でもたまに
高校生になってもいまだに親と
風呂に入ると公言する人もいる。

有理香の言うとおり
親孝行の一つだと思えば
なにもおかしな事はない。

落ち着いて考えると
なんで俺はさっきまで
モヤモヤしていたんだろうと
不思議に思ってしまう。

昔からパパっ子だったのもあって、世間と比べてもうちの父妹の仲はかなり良いと感じる。

母親が浮気で家を出てからも家事を率先してやってくれたり人一倍、責任感もある性格だ。

そういうアイツから見たら毎日、大学やバイトに明け暮れて家の事を何もやらない俺は、さぞかし無責任に映ることだろう。

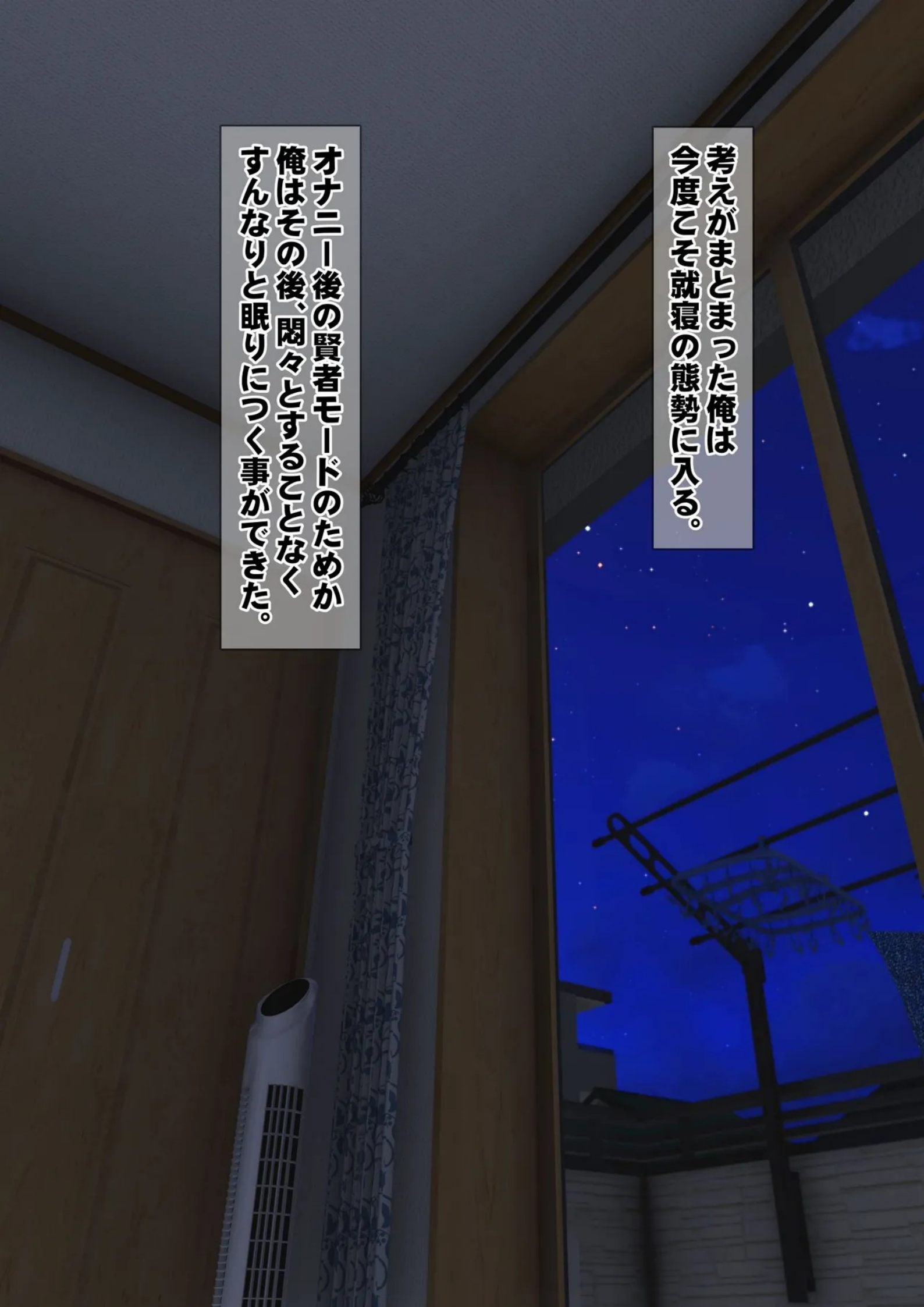
大して考えもせず説教じみた事を言ったのは俺が悪かったかもしれない。

明日になったら
有理香に一言詫びを入れるか。

そしてついでに
日ごろの感謝も伝えて
機嫌を取っておこう。

なんだかんだ言っても、
有理香は俺にとって可愛い妹だし、
関係は改善しておきたいしな。

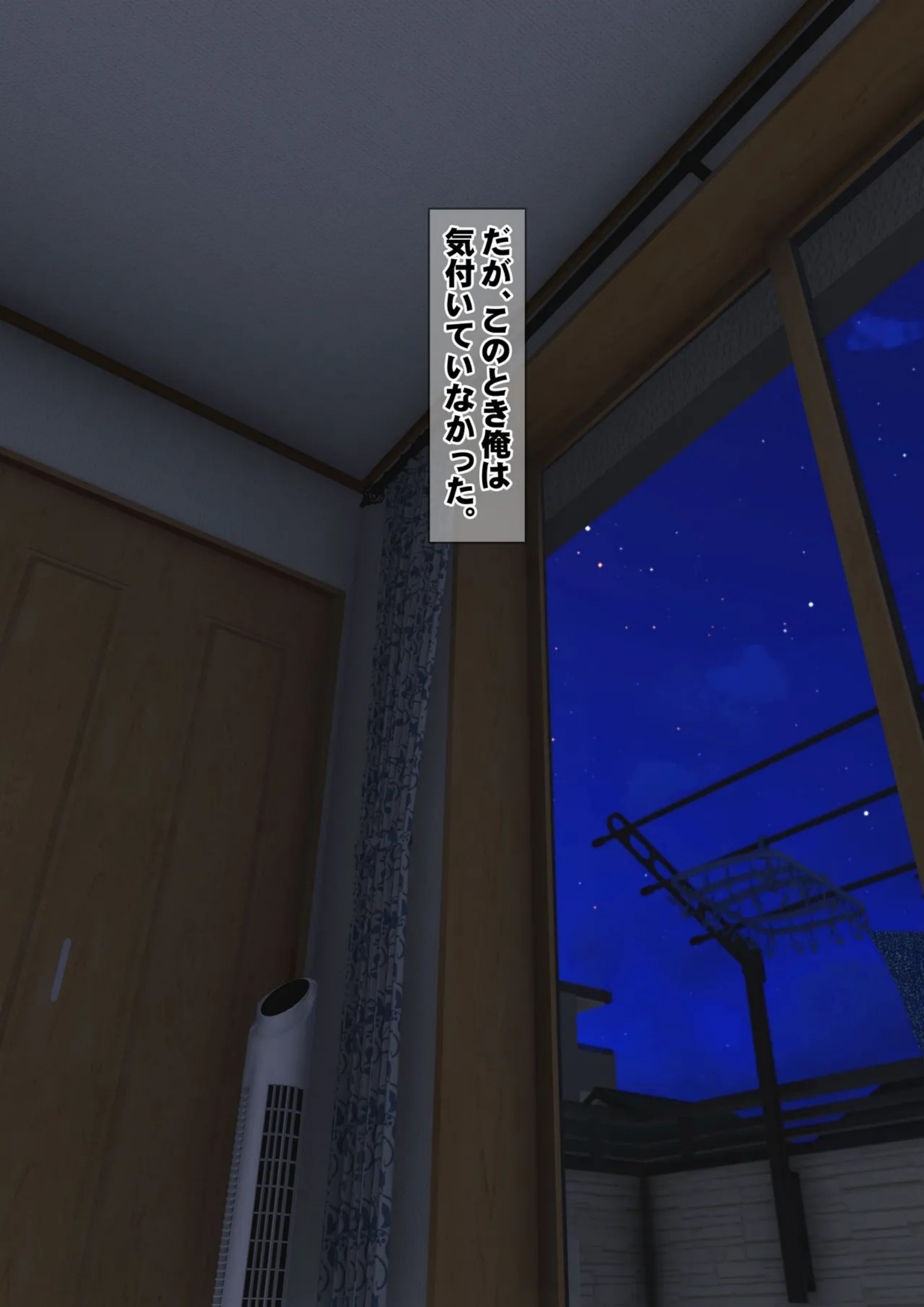
とりあえず
アイツと仲直りしよう。



考えがまとまった俺は
今度こそ就寝の態勢に入る。

オナニー後の賢者モードのためか
俺はその後、悶々とすることなく
すんなりと眠りにつく事ができた。

だが、このとき俺は
気付いていなかった。



この時すでに
家族の崩壊は始まっていたのだ。

翌朝、俺は普段より
少し早い時間に目覚めた。

今日の大学の講義は
午後からの予定だったので
俺はもう一度寝直そうかと
目蓋を閉じる。

だが、昨日の有理香との
出来事を思い出し
俺は身体を起こした。

時刻を確認すると
ちょうど朝の7時を
回ったところだった。

有理香は確か7時半くらいに
家を出て学校に向かうはず。

時間に余裕があるのを確認し、
俺はとりあえず1階に降りて
リビングに向かう事にした。



俺は階段を下りながら
さて、どうやって有理香に
声をかけるべきかと考える。

やっぱりシンプルに
「昨日は偉そうにスマン。」
と謝って様子を見るか。

その後に、
「いつも感謝してる」
としっかり伝えよう。

そうすればアイツも
ある程度は許して
くれそうな気はする。

リビングのドアの前に来た俺は、
玄関先で声がすることに気づいた。

それは有理香の声と
親父の声だった。

俺はなんとなく気になって
玄関へ向かうことにした。

玄関先には有理智と
親父の姿があつた。

有理智はすでに制服姿で
通学の支度は済んでいる。

どうやら親父の見送りのために
玄関に来たようだった。



俺は先にリビングで待機しようと考えて踵を返した。

親父とは昨日、脱衣所で鉢合わせしてしまった手前顔を合わせづらかったのだ。

だが、そのとき玄関先でなにやら揉めるような声が聞こえてきた。

だからヤダって！
そういうのはさあ。

何が嫌なんだ？
今更じゃないか。

昨日だって…なあ？

だからさあ〜…
ああいうのはもう
二度としないって！

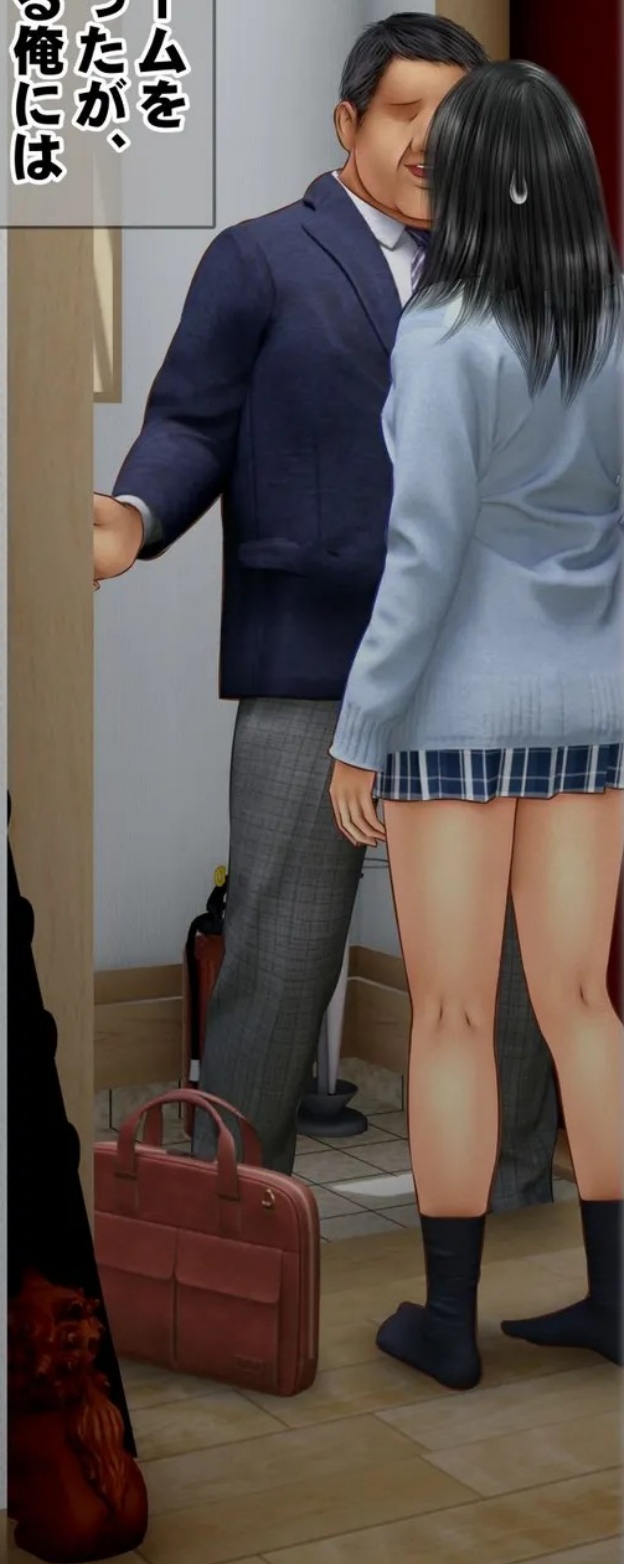
勘弁してよあ〜。



物陰から様子を伺うと
有理香と親父がなにか
言い合ってる様子だった。

二人は声のボリュームを
抑えているようだったが、
すぐ傍で聞いている俺には
内容が筒抜けだ。

俺は二人にバレないように
気を付けながら耳を傾ける。



てか、もういいからさっ
早く会社行ってよお。

遅刻とかしたら
怒られるんでしょ？

ははは……。
困ったなあ。

有理香がちゃんと
お見送りしてくれないと
出勤できないじゃないか。

ええ〜？
なにそれえ。



なあ…頼むよ。
有理香あ。

「アレ」してもらわないと
仕事も頑張れないんだ。

父さん意思が弱いから
また、前みたいなことにな
っちゃうかもしれんし。



は？なにそれ？
意味わかんない。

もうあのお店は
行かないって
約束したじゃん。

はは…もちろんだとも。

だけど父さんも人間だから
寂しくなることもあるしなあ。



ちよつとさあ〜。
そういうこと
言うのズルくない？

私だって出来ることは
やってるんだしさあ。

お父さんの問題なんだから
少しは自分でなんとかしてよ。



わかった。
わかった。

有理香の気持ちには
父さんよくわかった。

だから、一回だけ
お願いできないか？

これが終わったら父さん
すぐに会社行くから……な？



：ホントに約束
守れるの？

ああ、守るとも！
ちゃんと約束は守る。

はあ：もお。。。
じゃあ一回だけね？

てか、これ済んだら
すぐ会社行ってよね。

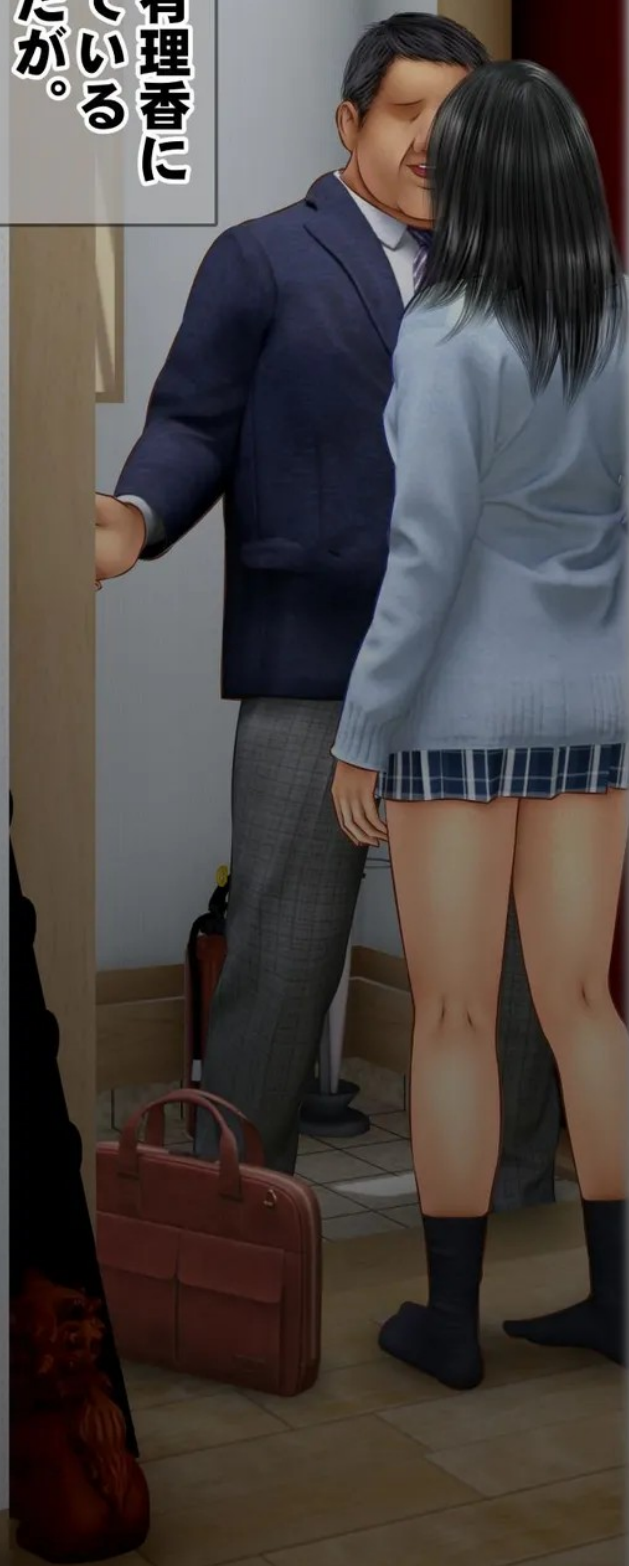
ああ、了解だ。



俺は二人の会話を聞いていたが、何の話をしてるのかさっぱり理解できずにいた。

どうやら親父が有理香になにかを要求しているみたいではあったが。

それがどういう要求なのか俺には全く想像できなかった。



ねえ：ちゃんと
歯みがいた？

ははは：。
もちろん磨いたぞ？

口臭かったら
すぐやめるからね。

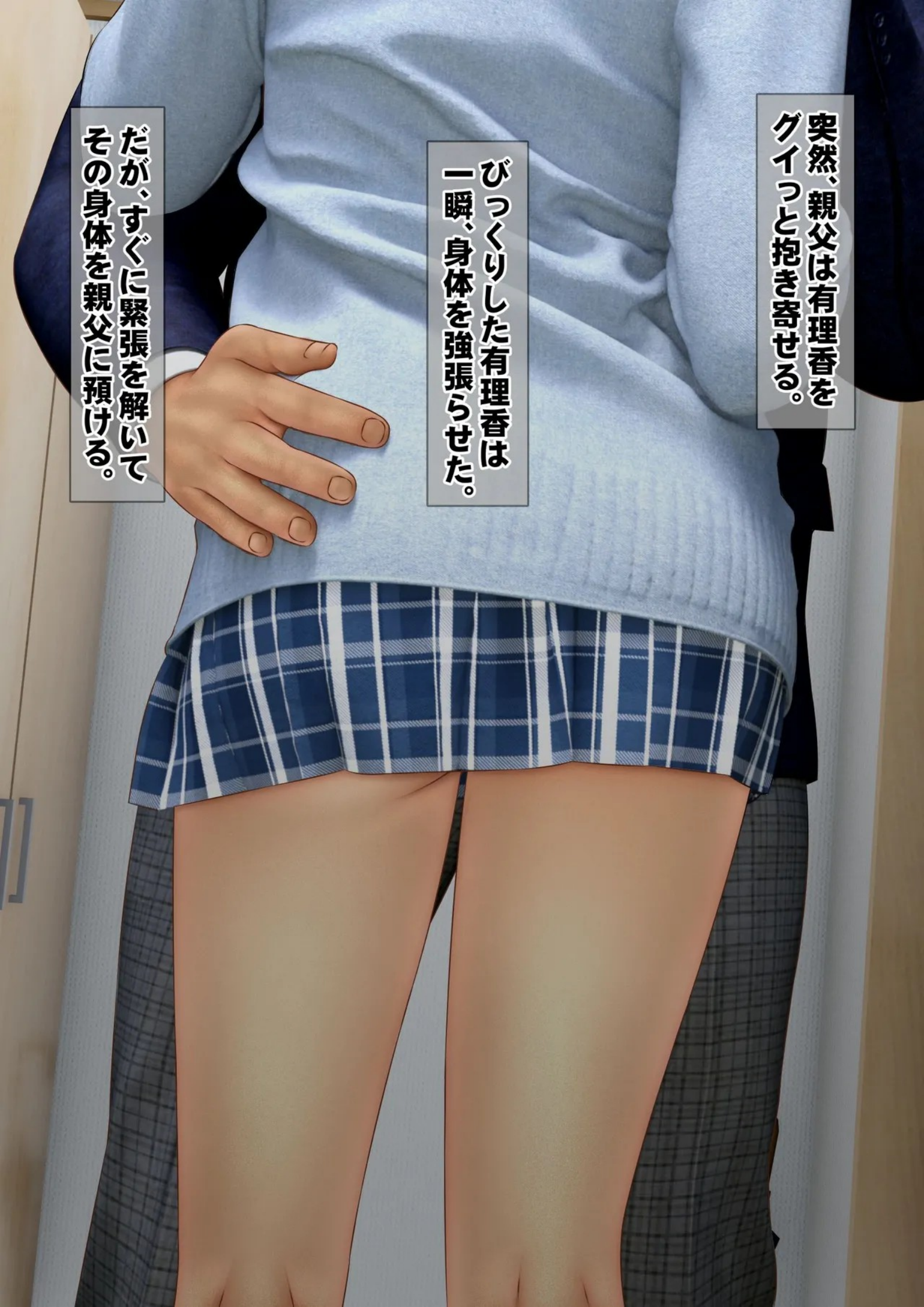
わかった。
わかった。



俺が見ている前で
有理香はゆっくりと
親父に歩み寄っていく。

さつきまでと明らかに
勇気の違い二人。

俺はなんとなく
嫌な予感がし始めた。



突然、親父は有理香を
グイッと抱き寄せる。

びつくりした有理香は
一瞬、身体を強張らせた。

だが、すぐに緊張を解いて
その身体を親父に預ける。

そして次の瞬間――

二人の唇は重なっていた。



はい。おしまい！

なんだ？
もう終わりか？

一回だけって
言ったでしょ？

ちゃんと口にして
あげたんだから
これで満足してよ。



予想外の行為を
目の当たりにした俺は
パニックに陥っていた。

さっきのはなんだ？
一体なにしてたアイツら？

いくら仲がいいとはいえ、
キスはやりすぎだろ！

しかも口同士でするとか
頭おかしいんじゃないか？

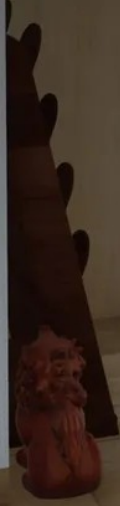
ドキ

ドキ

ドキ

ドキ

だが、二人の行為は
それで終わりではなかった。



なあ……有理香。
もう一回してくれないか？

さすがにコレだけじゃ
父さん物足りないよ。

ええ、一回だけって
言ったじゃん。

あと一回だけで
いいんだ……頼むよ。



ダメだって。
一回だけって
約束だもん。

ほら、早く会社に
行きなよ。お父さん。

冷たいなあ……有理香。
そんな邪険にしたら
父さん傷つくぞお？

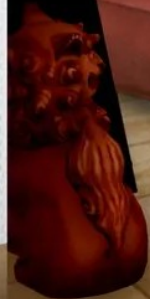


そんなにゴネても
ダメなものはダメ!

てか、いい加減
家でないと遅刻するよ?

有理香の見送りを
ちゃんと貰わないと
出勤できないんだ。

なあ、頼むよ。
有理香あ……。
最後の一回だけ。



っ

あっ…ちよ、ちよつと!

ダメって
言ってるじゃん。
や…やめてって。

ビィ

ビィ

マッパ…マッパ…
やめ…んんっ!



親父は有理香を抱き寄せて強引に唇を奪った。

有理香は身をよじって抵抗を見せていたが、親父の力に敵わないのか逃れることが出来ない。

有理香はなすすべもなく親父と唇を合わせていた。



二度目のキスは
なかなか終わらなかつた。

有理香はしばらく暴れていたが
やがて抵抗が無駄だと悟ったのか
大人しくなっていた。

それをいいことに、
更にねっとりとお理香の
唇を堪能する親父。

そのうち有理香の表情は
トロンとなっていた。

ん

ん

ん

はあ

はは：どうしたんだ？
そんなに切ない顔になって。

父さんのキスが
そんなに良かったのかあ？

う、うるさいなあ。

てか！お父さん。
一回だけって言ったのに
また約束やぶったでしょ。



ん〜？じゃあもう
終わりにするか？

有理香がそんなに
キスが嫌って言うなら
仕方ないしなあ〜。。。。

はー

な：なにそれ？
ここまでやっという
そんな事言っちゃう？

はー

お父さんのそういう
意地悪なところ嫌い。

ふふ・素直になってきたな。
じゃ、もう少し楽しむか？

てか、お父さん……
電車の時間はいいの？

大丈夫さ。
遅延して遅れたって
言っておけばいい。

怒られても
知らないよ？

はー

はー

はー

次の瞬間、有理香は自ら腕を回して親父にキスをする。

再び、玄関先でお互いの唇をむさぼり合う二人。

そしてやがてキスの音は粘液が絡み合う水っぽい音に変化していく。

気が付くと二人は
ディープキスを始めていた。



さっきまでの
フレンチキスとは違う
ガチのディープキス。

玄関先に水っぽい
ちゅぱちゅぱという
卑猥な音が響き渡る。

有理香はさっきまでとは違い
親父に積極的にキスを
ねだっているようだった。

あっ..

ちゅるん..

はあっ
ちゅぱ。



ねえ：お父さん。
私もそろそろ時間
ヤバイかも……。

せっかくノってきたんだ。
少し遅れてもいいだろう？

でもさあ……
遅刻あると受験とかで
不利になりそうじゃん？

じゃあ後で父さんが
学校に連絡を入れて
おくから安心なさい。



学校に連絡って……
んっ……そこまでする？

当たり前じゃないか。
親子のスキンシップの方が
学業より大事だろう？

んっ……これって
絶対スキンシップじゃ
ないんですけどお……

はは……まあ
なんでもいいじゃないか。

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

おお：有理香のお尻
ムチムチだなあ。

やっ：ちよちよちよちよっど!!

ムチムチ

ピョッ

〜

!

!

なにしてんの!
ちよつと・コラっ。

手っ!この手っ。
マジ放してよっ!

ん〜?
いいじゃないか。
ちよつとくらい。

ダメだって!もう。
放してって。マジで。



びん

びん

ふざけるのも
いい加減にして!

マジで怒るからね?

ハハ

オイオイ。
そんなに抵抗すること
ないじゃないか。

くっく

昨日は許して
くれたのに……。



だ、だからさあ！
こういうのは
やりすぎなん
だってばあ……。

やっ……ちよっと。
こうあ！

いいじゃないか。
減るもんじゃないし。

おお……相変わらず良い
肉付きしてるなあ。



あつ：もお：：
そんなに激しく
揉まないでよお。

ちよ、調子に
乗りすぎだって！

はは：激しくされると
燃えてくるだろう？

い、いらないから。
そういうのっ！



最初はお尻を触られることに抵抗していた有理香だったが、強引に押し切られてしまう。

やがて親父はセクハラまがいの手つきで尻肉を堪能し始める。

その卑猥な愛撫は数分間に及びついに有理香も我慢できずに艶めいた吐息を漏らし始めた。



お父さん…ダメ々…
これ以上したら…学校
行けなくなっちゃう…。

はあ

ちゅぽ

ん…

へ…

ん…いいじゃないか？
いっそのこと、今日は
休んじゃうか？

父さんの部屋で
じっくり可愛がって
やるぞお？

ちゅる

あ…

し…

もお…また
そういうこと言う!!

んあ…

さすがに私だって
そこまで面倒は
見れないってえ…。

はあっ

恋人作るとかさあ
自分でなんとか
してっばあ。

ピョッ

ん…

あ…

ん…



そうかあ〜？

有理香が父さんの
恋人になってくれたら
最高なんだけどもなあ。

それは無理っ。

娘にそんなこと
期待しないでっ。

はは・残念だなあ。



まあいいか。
有理香がこうして
触らせてくれるなら。

あっ..

ん、それにしても
本当に良い肉付き
してるよなあ..ふふ。

はあっ

父さん..なんだか
年甲斐もなく
興奮してきたぞお。

ん..

ん..

ん..

ん..



なあ…有理香。
おっぱい吸わせて
くれないか？

は…はあつ？
な、なんで？

父さんなんだか
我慢できなく
なってきたなあ。

む、無理だつて！
それはさすがに。

はー

はー

はー

く

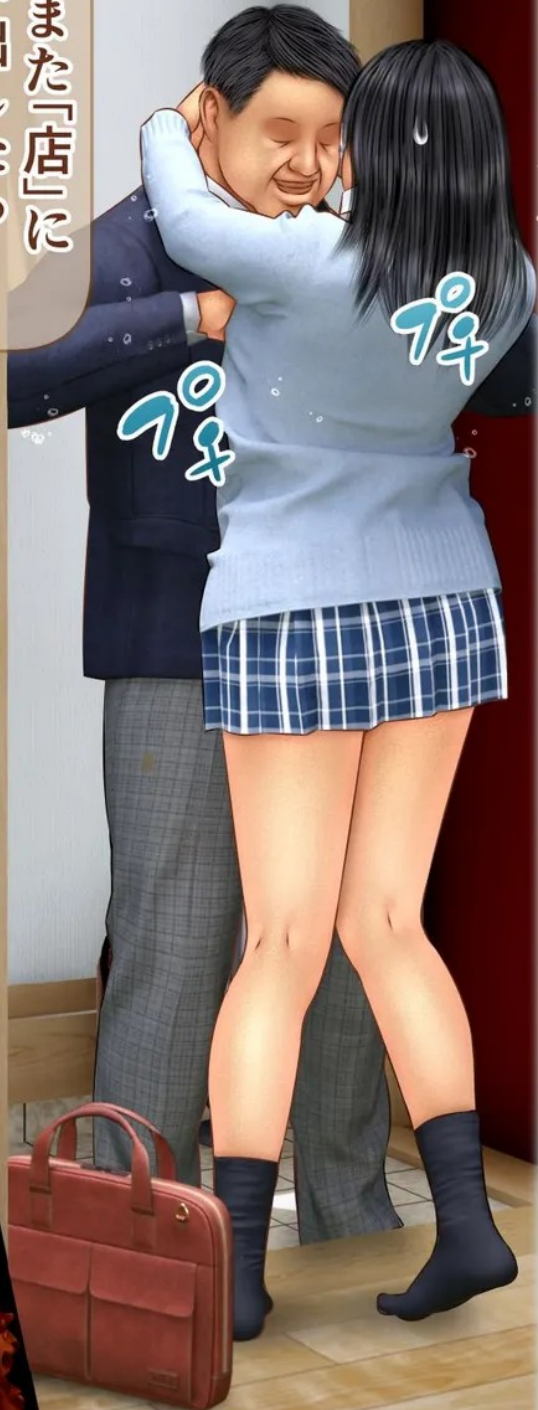


や、やめてよ。
お父さん!

頼むよ。父さんには
有理香しかいないんだ。

父さんがまた「店」に
毎日、通い出したら
有理香も困るだろう？

そ、そうだけどさあ!



お店でやってた事を
私に求められても困るし！

父さんだって好きで
生活費を使い込んだ
わけじゃないんだぞ？

父さんは寂しくて
気を紛らわすために
店に通ってただけで。

知らないから！



父さんはなあ：
母さんがいなくなっ
てから
有理香だけが心の支えなんだ。

拒絶されたら父さんはもう
ダメになるかもしれない。

大げさなんだけど！

エロいことしたい
だけのクセに。

そんな事言うなよ
有理香あー。



親父は嫌がる有理香を説得して無理やり上着を脱がせていく。

文句をいいながらも強く拒めない様子の有理香。

やがて親父に服を脱がされブラだけの姿にされてしまう。

俺は異常だと感じつつもその行為を止めようともせず、ただ見守り続けていた。



さあ有理香：いいぞ。
ブラを外しておくれ？

ええー？本当に
やんなきゃダメ？

フゥ..

てか、お兄ちゃん
起きてきちやう
かもだし。。。



俺は有理香がこちらを振り向く前にとっさに顔を引っ込める。

いま、覗き見してるのがバレたら終わりだと感じた。

俺はしばらくの間廊下の奥で様子を伺う。

バレずに済んだ事を確認して俺は再び覗き行為を再開した。

ドキ

ドキ

ドキ

ドキ

てか：本当に
やんの……これ？

なんかマジで
嫌なんだけど……。

頼むよ有理香あ……。

店には行けないんだし、
もう有理香に発散して
もらうしかないんだよお。

グニッ



はあ…もぉ…
こういう事に付き合っ
てあげるの今だけだからね？

早く恋人とか
見つけてよね？

ああ、わかった。
父さんちゃんと
恋人も作るから。

約束だからね？

ハロサッ



うう。。

じゃあ、ほら。
いいよ？

おお・綺麗だ！

十代の肌は張りがあったて
たまらんなあ。。。ふふふ。



じゃあ：早速
頂くとするか。

あつ……！

セクシ

ア

い、いきなり
そんなっ……

ふふ：感度も
なかなか良さそうだ。

ちゆる……

ちゅぽ……



親父は大きな音を立てながら
娘の乳首を吸い始める。

有理香のピンク色の乳首は
親父の唾液まみれにされて
エロい光沢を放った。

胸は敏感なのか、
強く吸われるたびに
有理香は反応していた。

はぁっ

んっ

んっ

んっ

ちゅる

ちゅる

あっ

ちゅる

んっ



んんっ…やっ!
舐めないでよ!

き、気持ち悪い
っごばあ…それ。

はは、何を言うんだ。
慣れたらこれが
気持ちいいんだぞ?

よ、余計な事
しなくていいから。



んっ
あっ
はっ
んっ
はっ

あつ…ダメ!
ダメっ…!!

はあ

お父さん…
いやっ…あつ。

そ…そんなぐろぐろ
舐めないでえ…

あ…

ぐろ

ぐろ

あ…

ぐろ

はあ

はは…どうした?
気持ちよくなって
きちゃったのかあ?

ぐろ

ぐろ

ぐろ



親父は有理香の乳首を
時間をかけながら
じっくりと堪能していた。

吸って、舐めて、甘噛みして
唾液を塗りつけていく。

乳首を執拗に攻められ
有理香はだんだん余裕が
なくなっていた。

どろろ

んあ

んあ

あ

んあ

ちゅぽ

ちゅぽ

んあ

んあ

あ

んあ

あ



お父さん：ダメ！

もうダメ！
もうやめて。

限界：限界きちやう。

ビクッ

アッ

はぁっ

あっ

んあ！

んあ！

はぁっ

ちゅぽっ

ちゅるっ

ちゅる

ん？いいじゃないか。
もっと気持ちよくなっ
ていいんだぞお？

はぁっ



ダメだって！
ホント…マジでっ！

や…やめて。
お、お願いっ。

はあっ

ふふ…父さんは
やめないぞお？

夜の店で鍛えた
父さんの舌テクニク
堪能させてやるからな。

ん…

ちゆる

あ…

ちゅぽ

んあ…

ちゆる

せろ



まげ：眼界なんだって！
ま、マジでっ……

こ……これ以上されたら
ホント……おかしく
なっちゃうからあっ……

お父さんやめて！
や……やめてっ……

ふふ……逃がさんぞお？

どろろ

んあ……

ちゅる

ちゅぽ

んあ……

んあ……

どろろ

んあ……

どろろ

どろろ

どろろ

んあ……

あつ：んっ：ああつ！

ダメ：あつダメっ！

ピクッ

んっ

き：来ちやうつて！
なんか来ちやうつ！

いやっ：いやあめっ！

んっ

ちゅぽ

ちゅぽ

ちゅる

ピクッ

んあ

あっ





あー
ぐんぐんぐんぐん

ぐわんぐわん

ぐんぐん

あー



限界を超えた有理智香は
身体をビクンと跳ねさせる。

有理智香が絶頂を迎えたのは
明らかだった。

親父のテクニクで
有理智香は乳首だけで
イカされてしまったのだ。

ふふ・有理香あ…。
今、イっちゃったんだらう？

え？ち、違うし。

カマ

はは…隠さなくても
いいんだぞ？

有理香が気持ちよくなっ
てくれたら父さんも嬉しいんだ。

ムニ

ムニ

ムニ



なあ：有理香。もっと
気持ちいいことしないか？
父さんが教えてやるぞ？

はあ？ちよつと
何言ってるの？

実の娘を口説くなんて
頭おかしいってば。

そうかあ？
さっきは凄く良い
顔してたじゃないか。



てか：それよりっ！
なに普通に胸揉んでるの？

触っていいなんて
一言も言っていないでしょ？

はは：スマンスマン。
柔らかそうでつい。

うう：もおっ！

はあっ

はあっ

あっ

あ

んあ

せりっ

んっ

てっ

いっ

いっ

いっ

っ



しかし：有理香の
おっぱいは本当に
よく育ったよなあ。

有理香の成長を
感じられて父さんは
嬉しいぞお？

それっぽい事言っても
説得力ないからっ…！
この…ドスケベっ。

ん…
ん…

はぁっ

ん…

ん…

はぁっ

ん…

ん…

ん…

ん…



しかし本当に母さんの若い頃に似てきたよなあ。色白で…巨乳で…。

は？なにそれ超ヤダ。

てか、あの人の話はしないでくんない？

あっはっは。そうだったな。

母さんの話は有理香には禁句だった。

んあ…

いっ
て

いっ
て

はあ

ピクッ

あ…

く…



しかし：母さんも若い頃は
かなり性欲旺盛でなあ。
凄かったんだぞお？

有理香もきつと
セックス好きな素質が
十分あると思うぞ。

あ：あのさあ。
親がそういう事
言っていていいわけ？

はは：父さんと有理香の
仲じゃないか？



でもさ...そういう...
エッチとかって最初は
めっちゃ痛いじゃん？

やっぱ...怖いっていうか。

ん...？心配いらないぞ？
父さんはベテランだからな。
痛くしないコツもあるし。

え...、コツがあるの？

はあっ

はあっ

んあ...

はあっ

はあっ

はあっ

あ...

あ...

あ...

ん...



ああ：あるぞ。
しかも有理香には
特別優しくするからな？

ん..
あ..

ちゅる

で：でもやっぱ
近親相姦は：んっ。

ちゅほ

いっ

いっ

はあ

んあ

はは：そんなに固く
考えることはないさ。
練習だと思えばいい。

んあ

一番最初の相手は
ベテランに任せた方が
絶対にいいんだから。



有理香は親父に口説かれて
徐々にHする方向へと
流されているようだった。

このままだと有理香は
部屋へと連れ込まれてしまう。

そうになったら間違いなく
親父に犯されるだろう。

今更になって俺は
この状況に焦り始めた。

じゃあ：とりあえず
部屋に行かないか？

は、はあ？
するって決めた
わけじゃ：んっ。

物は試しじゃないか。
出来るとこまでまずは
チャレンジでな？

で、でも：んんっ！

はは：その気になるまで
キス攻撃しちゃうぞお？



俺は二人の様子を見て
一刻の猶予もない事を悟った。

なんとか二人の行為を
やめさせようと
俺は必死に頭をひねる。

今更この状況の中に
飛び込んでいく勇気はないし、
出来れば間接的に止められないか。

すると、ある妙案が
俺の頭に浮かんだ。

俺は急いで部屋に駆け戻り
目覚まし時計に手を伸ばした。

アラームをONにして、
指定時刻を1分後にセットする。

音量が最大になってる事を
確認して再び机に置く。

そして俺はすぐさま
部屋を後にした。



二人は俺の部屋で鳴っている
目覚ましのアラーム音を聞いて
かなり動揺していた。

俺がすぐに起きてくると
思ってた焦っているようだ。

さっきまでの危険な雰囲気は
もう台無しになっていた。

親父は有理香に強引に促され
会社に行く準備を始めたようだ。

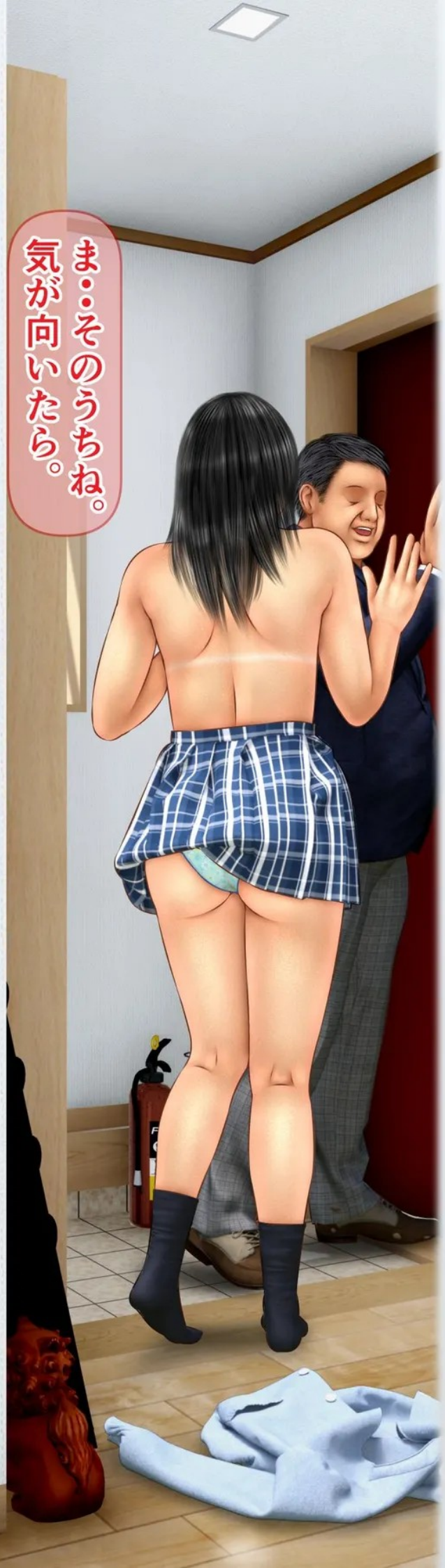
はあ：いいところ
だったのに残念だなあ。

帰ってきたら
続きをしような？

ま：そのうちね。
気が向いたら。

はは：つれないなあ。

じゃーね。



はあく……。
さつきは危なかったあ。

マジで部屋連れ込まれて
やられるかと思った……。

ちゃんとハッキリ
拒否しないとダメだなあ。
わかってるんだけど。

はあ……。今夜も風呂
入りたいとか言われたら
どうやって断る……。



親父に脱がされた上着を
回収しながら有理香は
一人で愚痴りだす。

その様子を見ると
有理香はどうやら親父に
望まない関係を強いられて
いるらしかった。

確かに、さっきの行為は
スキンシップの範囲を超えていた。

しかし、それにしても
どうして有理香は親父を
強く拒めないんだろうかと
俺は疑問に感じていた。



俺は一旦部屋に戻ってきた。

有理香が学校に行ってしまったまで
部屋で待機するつもりだった。

俺は二人がどうして
あんな関係なったのかその
原因を探りたいと考えていた。

今日はとりあえず
大学の授業は休もうと決めた。



やがてしばらくすると
玄関のドアを開け閉めする音が
一階から響いてきた。

どうやら有理香が
学校に向かったようだ。

俺は部屋から出ると
まずは親父の部屋に
向かうことにする。

部屋中探し回って
二人の関係のきっかけになる
事情を掴みたいと思った。

だが、その好奇心は
結果的に俺自身を追い込むことになった。